

Night

Train

和

夜、電車の扉のサイドにある手摺りに寄り掛かって見る街並みは幻想的だ。

少なくとも私にはそう見える。

黒い空気の中に浮かぶ光。それは電車を追って、しっかり私の眼の中に飛び込んでくる。景色は流れ、その度に様々な光が映る。電車がトンネルに入れば、硝子に車内の光が反射するから見たくもない私の顔が映るが、首都圏のJRは大体地上を走るので、そんなことはない。だから今もこうして景色を楽しんでいるのだ。

夜の闇が光を吸い取るからか、見えるビルの地色はわからない。しかし、規則正しく並んだ硝子窓の形の光はよく見える。いくつものビルにランダムに灯る光は、見ていて綺麗だ。何かの模様に見えなくもない。いや、もしかしたら残業のサラリーマンが、そうやって部屋の電気を点けたり消したりして、何かのシグナルを送っているのかも知れない。それで、向かい合ったビル同士で夜の会話を交わすのだ。

本当にそうなのだとしたら、私は残業するサラリーマンになってもいい。どんなに面白いことだろう。

景色は緩急の流れをもってして変化していく。光、光、闇、光。

わたしはそこでまた、ふと考えた。この光の配列に、何か規則性はあるのだろうか。

景色が流れるのが早いため、ビルに灯る光の形を覚えるのは難しい。規則性なんて、見つける方が難しい。それでも、複雑なパターンの中で規則性を探す研究をしている人もいるらしい。もしかしたら、夜の街を歩いて、ビルに灯る光の規則性を研究している人がいるかもしれない。曜日や時間帯で分け、地域やビルの特徴でも分けて解析するのだ。案外、何か見えてくるかもしれない。ただ、広範囲の調査はちょっと骨が折れる。私にはその研究は無理そうだ。

電車に乗っていると、ついついこんな非生産的なことを考えてしまう。

しかしこれが楽しい。一日の締めとして、相応しいではないか。

人間は、生き物の中で唯一、非生産的な思考を持つ。規則性だの傾向だの、なにかにつけて原因とやらを充て嵌める。因果を結び付けずに考えることが出来ないのだ。なんと束縛された考え方だろうか。

鳥が囀るのに理由は要るのか？

動物が動物を狩るのに理由は要るのか？

私が生まれたことに理由は要るのか？

これら全てに理由を充て嵌める。

実に滑稽だ。

私が生きる理由を述べる輩がいるとしたら、実に滑稽だ。きっと、尤もらしい言葉を並べるに違いない。社会の為、自分の為、愛する人の為に。どれも応えで、答えじゃない。答えなど、言葉で括れるようなものではないのに。

滑稽だ、因果に縛られて。

そして、それを考える私も滑稽だ。因果に縛られて生きていることに慣れてしまった私。そこから飛び出そうとして。まだ、諦めきれない。

電車が減速を始めた。それに合わせて、車内にアナウンスが流れる。

『次はあ、三途の河・河岸駅、三途の河・河岸駅～』

見れば、先程まで見えていたビルの光は私の足元より下に見える。代わりに、頭上で輝く星がよく見えるようになってきた。都会では、中々見れない数だ。三途の河って、天の川のことだったのか、と私は思った。この電車は地上を、緩やかな螺旋を描いて上昇していく。今は夜で見えないが、反対方面に行く路線も、私のすぐ横で螺旋を描いているに違いない。昼間にこの線路を見ることが出来たら、きっと綺麗な、天を貫く二重螺旋に見えることだろう。

やがて電車はホームに滑り込んで停車した。

『当車はこの駅にて、長時間停車致します。発射の際はベルにて二度お知らせ致します。次の停車駅は三途の河・彼岸駅です。お乗り間違えのないよう、お気を付け下さい』

そんなアナウンスが聞こえて、扉がすうっと開いた。扉のすぐ横にいる私は、足を一步踏み出せば、すぐホームに降りることができる。今まで席に座っていた人は立ち上がったたり、窓の外を食い入るように見つめたりしている。一度ホームに降りて、すぐ戻って来る人もいる。皆、どうすべきなのか迷っているのだ。私はこの手摺りに寄り掛かった姿勢のまま、外を見つめた。

足元に光、頭上にも光。しかし今は、頭上の方が近い。

足元をもう一度見る。ビルは、あんなに離れたのにまだ光が届くなんて。

私は、まだ諦めていないのだろうか。諦めきれないのだろうか。それすらも、もうわからない。

私は、そしてこの車内にいる人々はこれからどうするのだろうか。どうなるのだろうか。わからない。

わからないことだらけなのだ、結局。ここまで来ても、まだ迷うのだ。人として、当然の思考。でも、それを受け入れるか否かは別問題。そこからあがくか。諦めるのか。

迷う。

ぐるぐると。

この螺旋線路のように。

掴めない。

地に、天に灯る光のように。

私は。

まだ、迷う。

そして、ホームに降り立った。

電車に乗った。

そんなこと、日常茶飯事で別段珍しいことではない。

電車は普通の私鉄、各駅停車。車体の外装は長年使われているせいか、ちょっとくすんだ黄色で、内装も古めかしく見栄えがしない。毎日乗る電車である。見飽きたを通り越して、あって当然の存在。

その電車が、今日は様子が違っていた。

空いていたのである。

その日は金曜だったから、仕事帰りに同じチームの先輩後輩と飲みに行った。電車にのっただけで23時を過ぎていたが『金曜の夜、イコール、世のサラリーマンは心のアルコール消毒の日』である。定時上がりの時間帯よりもむしろ、終電前の方が混む日だ。なのに、その時ホームに滑りこんできた電車は驚くくらいに空いていたのである。

思わず酔いが覚めてしまった私は、七人掛けの座席の真ん中に座った。人が多いときは端でも構わないが、少ないときはドアが開く度に寒くてかなわない。ほかの座席には端に座る人がぽつぽつといるだけだ。

私はこの電車で三十分ほど乗って帰る。座れたら音楽を聞きながら寝るか、本を読むかのどちらかである。だけれど飲んだあとと言うのはあたまが回らないせいか本は読めない。寝て乗り過ごすのも危険なので、ただ車内広告を見たり、風景を見たり。とにかくぼーっと過ごす。その日も、自棄に空いた車内の広々とした窓の外を、何も考えることなくただただ見ている。

「何見てるんですか」

そんな風に話しかけられたのは、確か二駅目か三駅目を通過したあとだ。伽藍とした車内なのに、わざわざ私の横に座った人が聞いてきたのだ。

驚いた、もちろん。

酔っ払いかと思ったが、顔は白い。いや、飲むと白くなる人を見たことがあるから、それかも知れない。しかし舌はちゃんと回ってるし、酒の匂いもしないから、そこまで酔ってないのだろう。ただ、困惑したのはそれ以外にもある。性別がわからなかったのだ。だぼだぼの黒いフード付きトレーナーにジーパン、スニーカー。それだけ聞けば男性っぽいけど、顔立ちが綺麗で女性的だ。髪が長ければそう決めただろう。しかし残念ながら、茶色のショートカット。声は低くないが、すごい高いわけでもない。化粧はしていない。アクセサリもつけてない。そうすると年齢の判断もしにくくなる。

とにかく、私はそんな変人に話し掛けられた。

「何見てるんですか？」

また聞いてきた。私の沈黙が長かったからだろう。

私は躊躇った。答えることにも躊躇ったが、答えそのものがないからだ。強いて言うなら、何も見ていない、が正解なのだろうが、いかにも彼彼女（性別がわからないのでこう表記する）は

納得しそうにない。なにせ、こんなところでわざわざ聞いてくるのだ。

私は一度、周囲を見た。みな寝ている。もしくは寝た振り。空いている別の席か、隣の車両に移動しても良かったが、それも躊躇われ結局答えることにした。

「別に何も……」

彼女は驚いた表情を見せた。

「え、あ、目が見えないんですか？」

「い、いや、そうじゃなくって……違います、目は見えます」

答えながら、何を私は必死に弁解しているんだろうと可笑しくなった。

「じゃあ、何を見てたんですか？」

ほら、やっぱり。私の想像通り、彼女はには何も見ていないという答えが通用しない。それにしても、予想外の切り返しだった。そんな彼女の受け答えを聞いてみたくなった私は、質問を質問で返した。

「何を見ていたと思います？」

パチクリと、彼女は二三度瞬いた。そして上目遣い。目線はさ迷っている。それが再び私を捉えたとき、彼女は口を開いた。

「過去」

「カコ？」

一瞬、人名かと思った。実際、カコという名の知り合いがいるから、そちらが先に出てきた。

「そう、今日の出来事、先週の出来事、もしかするとずっと子供のとき、とか。心の中で過去にタイムトラベルするんだ」

「なんで……そう思ったの？」

私は、少し恐ろしくなりつつも、ついつい彼女の答えに引き込まれ、聞いた。目が、と彼女は話しはじめた。

「目がね、前向きじゃなくて内側を向いてるように見えたんだ。遠くを見るわけでも、ぼーっと風景を眺めるでもなく、自分の内側をね。ボク、そういう人、すぐわかるんだよ」

「すぐって。さっき間が開いたじゃないか」

「それはあなたが受け止められる人物かを考えてたんだよ。たまに、すごい怒る人いるから。凶星だから怒るんだろうけどさ。……ボクだって怒られるの、やだもん」

「ああ、私は怒りそうにない？」

「それもあるけど、まだ見込みがありそうだし。だってあなたはボクと違って、ちゃんと自分の駅で降りるでしょ」

意味深な言葉だった。

自分の駅、とは何を暗示するのだろう。

そのとき、ちょうど電車は駅に着いて、ドアが開いた。冷たい空気が車内に流れた。

「ボクはここで降りるから」

そういう声が聞こえて振り返ったときにはもう、隣に彼女はいなかった。

そして、ぷしゅーっという音をたててドアが閉まった。

「それでそれで！！おじいちゃん、その人は結局誰だったの？」

「うん？」

そう言ったきり、私は答えなかった。孫は不服そうに頬を膨らませている。

あれは結局、夢だったのだと思うことにした。もう遠い過去の出来事なのだ。現実起こったことでも、掴めなければそれは夢にも等しい。

孫は手足をバタバタと動かして抗議の意を示していたが、そこに家内がジュースとお菓子を盆にのせてやってきた。おば一ちゃん、と孫が飛んでいく。

「おじいちゃんが、お話の最後を教えてくれないんだよう」

あら、と家内は微笑んだ。

「もしかして、またあの話？」

シワが増えた顔を私に向ける。その家内の笑顔に、私も笑顔で応えた。時間が経つのは本当に早いものだ。私が家内に話し掛けたあの日から、幾年が過ぎただろう。単に酔っていた私の話を、家内は不審に思いながらも応えてくれた。急に電車を降りた私を追って、家内はこう言ったのを、私は今でもはっきり覚えている。

「私は前を向くよ」

「ボクが降りたこの駅は、あなたの降りる駅じゃないはずだけど」

と、私は若干覚めた目で家内を見たらしい。しかし家内は首を振った。

「君だって、行きたいところはここじゃないんでしょう」

正直、家内のこの言葉には笑いそうになった。

私は単に酔っていただけなのに。ちょっと、ハイになっていたのだ。あの時は。

だけれど、彼女はそんな私に対して真剣に応えたのだ。私の言った自分の駅というのが、自分の目指すものの比喻だと思ったらしい。そして、私の目はそのとき内側を見ていた。だから、私に宣言をしたかったのだと言った。それだけ言うと、彼女は次の電車を待って、ホームに残った。次の電車は少し混んでいた。私はその様子を見送ってから、駅を出た。出てからそこが終着駅ではないことに気付いた。

「なるほど、ボクも内側を向いていたんだ」

これが出会い。

ボクが話し掛け、

私が応える。

そんな些細なことが、今にもずっとつながっている。これからも続くだろう。その終着駅には何があるのか、私たちは二人でずっと楽しみにしている。

月は、何故浮いているんだろう。

紺の空にぼわんと浮く月を見ていたら、そんなことを思った。

まんまる、とはいかないけど、それに近い月。なんだか浮いているように見えたということは、そのときの私はまだ酔っていたか、寝ぼけていたかのどちらかだろう。駅のホームはやたらと寒い。蛍光灯の光がそれを強調するかのようにはやたらと光っている。

月が見えても星が見えないじゃないか。

そんな八つ当たりとも言える気持ちで蛍光灯を睨んだ。瞬間、目が眩む。本当は視力が弱くてたいして星など見えない。なのに、それを別の何かのせいにしたかった。

そう、自分は悪くないじゃないか、何もかも。

今、ここにいることだって。

月が浮かんでると考えることだって。

いや、待て。本当に浮かんでるかもしれないぞ。

逆も有り得る。月から見たらこちらが浮いてる。

有り得るだろう。こう考えることの何が悪い。悪くはないはずだ。じゃあ進めよう。

浮く、としたら、何に浮いているかが肝心だ。この紺の空か。はたまた冷たい空気か。

空気は密度が小さいから、紺の空と言うことにしよう。月も星も、それに浮いている。その上を、みなもに浮かぶ木葉のようにくるくると回りながら漂うのだ。素敵じゃないか。実に良い考えだ。

折角、そう考えていたとき、東の空が少し白くなってきた。空は紺からその色を変えようとしている。

まったく、せっかちな空だ。

ああ、もしかしたらさっきの考えはあっているのかもしれない。月は、紺の空にしか浮かないのだ。だから、これから月は段々と沈んで、ついには見えなくなる。そうだ、そうなんだ、きっと。

白じむ空を見ながら、そう結論付けた。

きっと、自分も沈むんだ。

駅のホームの、空気が冷たい日のこと。ベンチで電車を待ちながら考えた。これの何が悪い？悪くないだろう。その証拠に、ほら。自分が沈んでしまう前に、ホームに電車がやってきた。

——ああ、これで沈まずに済む。

電車のドアが開く音が、やけに大きく聞こえた。

Night Train

<http://p.booklog.jp/book/23436>

著者：木住 和

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/SusanBrown/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23436>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23436>